３　つぎの文章は『』の一節である。病弱でいつもどこか気分の晴れないことが多かった作者の藤原経子が、あるとき宮中の人たちと舟で（現在の兵庫県東部）を訪れた際の紀行文である。これについて後の問に答えよ。

〈奈良女子大〉二〇二二年度出題

　に里に出でて、九月四、五日の程に尼崎といふ所に行くに、京を夜深く出でて、鳥羽殿近き程にて夜やうやう明け行く空に、木々のも色付きむる頃なれば、ある程にてなかなか面白し。１舟に乗らむとするに、数知らず、りあへぬまで舟多きに、聞き知らぬさまに恐ろしげなる声したる者どもひしめくを聞くにつけても、引きかへたる式もあはれにて、北山殿思ひ出でられて、「いかに」とだに言ひ合はする人もなし。はるばるぎ行くに、河霧立ちて、来し方行先も見えず。といふ所過ぐるに、ａ音にのみ聞きわたるをと思ひて、しばし見るに、遠ければ定かにはあらねど、の中より鳥の立つを、「にやあらむ」など言へば、

　　も　ありとばかりは　音に聞く　交野の雉　今日見つるかな

　また橋多く過ぎぬるなるに、「これなむ天の川に侍る」と言ふを見れば、橋破れてその形ばかりぞ僅かに残る。

　　これやこの　つの　恋ひわたる　天の河原の　の橋

　かくて日の入る程に行き着きぬ。２日は水の下にるとのみ見えて、河より海になるけぢめ、波荒く立ち、遙かなる沖に漕ぐ舟は、絵に画きたらむやうなり。の方を見やれば、住吉の松、絶え絶えにみて見ゆ。３立ち来る波風も、浦ならねばや、いたく激しき心地ぞする。昼、の浦といふ方に出でて見れば、浦の松風、波に通ひて、入り海心すごく、神さびていと尊し。浜にどもの、貝拾ひ、また沖釣するもあり。、網などいふ、干し置きたるを見れば、干すひまもありけるをと、

　Ａ　打ちへて　苦しき物と　思ひしに　海人の栲縄　干すひまもあり

　夕日の影面白きに、沖より海人の釣舟ども多く帰るもあはれなり。暮るれば遊女が舟ども、歌うたひ物数へなどするもをかし。ｂならず都のみ心とまりしに、海山隔たりぬる心細さを思ふに、４面影ばかり形見とて、波路遙かに月を眺むるさへ、よそに隈なき影も我からはなほ曇らぬ夜半もなし。

　かくて心なく数へられつる日数も程なくて、上るは、又立ち返りあかぬ心地して、さすが馴れぬる浦風に心はなびくかしと、５我ながらあやにくにて思ひ知らるる。来し方も遙かになりぬるも心細く、梢をみれども隔たり霞む雲井ばかりを眺めて、

　Ｂ　来し方を　顧みれども　はるばると　霞隔てて　そこはかとなし

　遅く出でて「明日も日暮れぬべし」と言へば、夜もすがら舟を漕ぐに、二十日の月なれば、くるままに澄みまさりて面白きに、皆人寝ぬれば、一人起き居て見るに、ｃ影も流るると見ゆる月は、なほこそれざりけり。よろづを思ひ続くるに、果ては物恐ろしき心地して心細し。

（注）　○里に出でて―実家に戻って。

　　　　○鳥羽殿――京都の南部にあった鳥羽院の離宮。

　　　　○引きかへたる式―宮中での生活や舟遊びとはうってかわった様式。

　　　　○北山殿―京都の北山の、かつて舟遊びをしたところ。

　　　　○禁野交野―禁猟区であった現在の大阪東北部にあたるところ。

　　　　○栲縄、網―漁業につかう縄と網。

　　　　○打ち延へて―絶えず海の中に引っ張られていて。

問１　二重傍線部ａ～ｃについて、簡潔に現代語訳せよ。

問２　傍線部１を現代語訳せよ。

問３　傍線部２について、「日は水の下に入る」とはどのような情景か、わかりやすく説明せよ。

問４　傍線部３について、「激しき心地」とはどういうことか、具体的に説明せよ。

問５　Ａ歌の「海人の栲縄　干すひまもあり」について、「苦しき物」と対比しつつ、解釈せよ。

◎問６　傍線部４について、

　　（ａ）「面影ばかり形見とて」を解釈せよ。

　　（ｂ）「よそに隈なき影も我からはなほ曇らぬ夜半もなし」とはどういうことか、作者の心情に触れつつ、解釈せよ。

問７　傍線部５について、どのようなことが「あやにくにて思ひ知らるる」というのか、説明せよ。

問８　Ｂ歌をわかりやすく現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝噂にだけは常に聞いている

「常に」は「以前から」「長い間」「ずっと」なども可。

　　　ｂ＝一通りではなく都ばかりが心にとまった

限定の意味がなければ減点２。過去の助動詞の訳出がなければ減点１。

　　　ｃ＝姿も流れると見える月

「姿」は「光」でも可。「見える」は「思われる」でも可。

問２　Ａ舟に乗ろうとするが、Ｂ数もわからず、避けきれないほど舟が多いうえに、Ｃ聞いたこともないほどに恐ろしそうな声をしている者たちがＤ押しあいへしあいするのを聞く

Ａ＝２〔「舟に乗ろうとすると」「舟に乗ろうとする時に」も可。〕

Ｂ＝２〔「舟の数が多い」「避けることができないほどである」という内容がなければそれぞれ減点１。〕

Ｃ＝３〔同内容可。〕

Ｄ＝３〔そのまま「ひしめく」としている場合は不可。〕

問３　太陽が海に沈み、眼前に一面の海が広がっている情景。

同内容可。

問４　Ａ入江ではないためか、Ｂ波風がとても激しくＣ感じられるということ。

Ａ＝３〔「浦」を訳出していること。〕

Ｂ＝３〔同内容可。〕

Ｃ＝４〔波風の激しさが「感じられる」を、「気持ちになる」など自身の心情の変化として表現している場合は減点３。〕

問５　Ａ海人の栲縄は、いつも海の中で引っ張られていて苦しいものだと思っていたが、  
Ｂ海から引きあげられて、干す時もあるのだなあ（ということ）。

ＡとＢを対比する書き方でなければ全体０。

Ａ＝６〔同様の苦しさに触れていれば可。〕

Ｂ＝４〔同内容可。〕

問６　（ａ）＝Ａ月の姿は都で見るのと変わらないので、Ｂ月の姿だけをＣ都で過ごした頃の思い出とする（ということ）。

Ａ＝２〔都で見る月と尼崎で見る月が同じ、と指摘していることが必須。〕

Ｂ＝４〔「姿」はなくてもよい。限定の意味を欠く場合は減点２。〕

Ｃ＝４〔「都」に言及していなければ減点２。〕

　　　（ｂ）＝Ａほかの人から見れば曇りのない月の光も、Ｂ体調も悪く、都を遠く離れた寂しさから塞ぎ込んだ自分から見れば、Ｃ夜ごとに涙で曇らない夜はなかった（ということ）。

Ａ＝３〔「ほかの人から見た月」として説明してあること。〕

Ｂ＝３〔作者の体調に触れていなければ減点１。〕

Ｃ＝４〔作者の涙に触れていなければ減点２。〕

問７　Ａ都を恋しく思っていたのに、Ｂいざ帰るとなると、慣れ親しんだ尼崎の浦風を名残惜しく感じているのが、Ｃ自分のことながら矛盾していておかしいこと。

Ａ＝３〔尼崎での生活を疎む、という内容でも可。〕

Ｂ＝３〔「いざ帰るとなると」はなくても可。〕

Ｃ＝４〔「矛盾した」は、「もとの気持ちに反する」「理屈に合わない」などの表現でも可。〕

問８　Ａこれまで過ごしてきた土地を振り返って見ても、Ｂ遙か遠く霞が隔ててそこがそうとはっきりしない

Ａ＝５〔「来し方」を「過去」などと訳している場合は不可。〕

Ｂ＝５〔「そこはかとなし」を「はっきりしない」という意で訳していない場合は不可。〕

【現代語訳】

　（八月）三十日に実家に（退出するため宮中を）出て、九月四、五日の頃に尼崎という所に行くと、京を夜遅く出て、鳥羽殿に近いあたりで夜が次第に明けていく空に、木々の梢も色づき始める頃であるので、色艶がある様子でかえって趣深い。問２舟に乗ろうとするが、数もわからず、避けきれないほど舟が多いうえに、聞いたこともないほどに恐ろしそうな声をしている者たちが押しあいへしあいするのを聞くにつけても、（宮中での生活や舟遊びとは）うってかわった様式もしみじみと趣深く、北山殿（の舟遊び）が自然と思い出されて、「なんと（違った様子か）」とだけでも言い合う人もいない。遙か遠くまで舟を漕いでいくと、川霧が立って、通ってきた方向も進んでいく先も見えない。禁野の一つ、交野という所を通り過ぎる時に、問１ａ噂にだけは常に聞いているがと思って、しばらくの間見ると、遠いのではっきりはしないが、柴の野原の中から鳥が飛び立つのを、「雉であろうか」などと言うので、

　　　昔もその鳥がいると評判にだけ聞いていた交野の雉を、今日見たことよ。

　また橋をたくさん通り過ぎたようだったが、「これが天の川です」というのを見ると、橋は壊れてその形だけがわずかに残る。

　　　これが、あの織女が恋し続けている天の河原の鵲の橋なのか。

　こうして日没の頃に（尼崎に）行き着いた。太陽はただ海の水（平線）の下に入ると見えて、河から海になる境界は、波が荒く立ち、遙か遠い沖を漕ぐ舟は、絵に描いたようなものだ。東北の方向を見ると、住吉の松が、たくさん集まって立っているのがとぎれとぎれに霞んで見える。立ってくる波風も、入江でないからであろうか、たいそう激しい感じがする。昼、貴布禰の浦という所に出て見ると、浦の松風が、波と響き合って、入江の様子は物寂しく、神々しくてたいそう尊い。浜に海人たちが、貝を拾い、また沖釣りをする者もある。栲縄、網などという（ものを）、干して置いてあるのを見ると、（水からあげて）干す時もあったのだなあと（思って）、

　絶えず海の中に引っ張られていて苦しいものだと思っていたが、海人の栲縄は干す時もあるのだなあ。

　夕日の光が趣深く照らす頃合いに、沖から海人の釣り舟たちがたくさん帰るのも風情がある。（日が）暮れると遊女の舟たちが、唄や今様をうたいなどするのも面白い。問１ｂ一通りではなく都ばかりが心にとまったうえに、海や山を（遠く）隔ててしまった心細さを思うと、（その月の）姿だけを都（で過ごした頃）の思い出として、波路遙かに（遠く隔たった所から）月を眺めるのさえ、他の人から見れば曇りない（月の）光も自分から見ればそれでも曇らない夜はない。

　こうして待ち遠しく自然と数えずにはいられなかった（尼崎で過ごす）日数も間もなく（過ぎ）て、（都に）上るのは、また反対に満足しない気がして、そうはいっても慣れてしまった浦風に心はひかれることよと、自分でも矛盾したことと思い知ってしまう。（都に向かって出発したが、）これまで過ごした土地も遙か遠くになってしまうのも心細く、（見慣れた）梢を振り返って見るが遠く隔たり霞んだ雲だけ（が見えるようになってしまったの）を眺めて、

　問８これまで過ごしてきた土地を振り返って見ても、遙か遠く霞が隔ててそこがそうとはっきりしない。

　遅く出発して「明日も（都に着く頃は）日が暮れてしまうに違いない」と言うので、一晩中舟を漕ぐが、二十日の月なので、夜が更けるにしたがってより光が澄んでいって趣深いのに、皆は寝てしまったので、（自分が）一人起きていて見ると、（水と一緒に）  
問１ｃ姿も流れると見える月は、それでも（舟に）遅れず付いてきた。いろいろなことを思い続けると、最後にはなんとなく恐ろしい気がして心細い。